

日本統合失調症学会創立記念第1回大会 公開講演会

「統合失調症治療はどこまで治るか、治せるか」

「統合失調症はどのような病気か：最近の進歩」

平安良雄

横浜市立大学大学院医学研究科・精神医学講座

統合失調症は、幻覚・妄想、意欲の低下や引きこもりなどの精神症状を中心とする病気である。一般に約100人に1人が罹患するといわれており、その経済的損失は国民総生産の2%にも相当するといわれている。多くは思春期の後半から青年期にかけて発病する。約30%は良好な経過をたどり、就労を含め社会適応が可能となるが、病気に対する不理解や、適切な治療の継続ができないなどの理由から、再発を繰り返すことも多い。このため、社会的な損失も大きい。

統合失調症の病態や原因に関しては不明な点が多いが、最近の脳科学の進歩によって、解明が進んでいる。従来解剖による研究から統合失調症の患者の脳は、一般健常者と比較して脳体積に減少が見られるといわれてきた。約30年前から、CTやMRIなどの神経画像検査法の進歩によって、脳内の様々な部位で器質的にも機能的にも変化が見られることがわかってきた。特に、前頭葉・側頭葉・海馬などの脳部位の体積は発病初期から変化が見られることがわかっている。このような形態的異常がどうして起こるかに関して、遺伝子の影響を踏まえた研究が進められている。同時に形態的異常によって、脳の機能にどのような影響を与えるか、また、精神症状の発現にどのような影響があるのかが調べられている。

神経心理学的検査結果から、統合失調症の本質的な機能不全は認知機能の低下によって起こると考えられている。認知機能とは、私たちが知覚したものをこれまでの学習や記憶に照らし合わせて、判断し実行に移す、生活していくうえでも基本となる能力である。この機能が適切に働くためには脳の各部位が適切に活動するだけでなく、部位同士の連絡が適切に行われなければならない。統合失調症においては情報処理をする際の神経活動ネットワークに障害が起きているという仮説が立てられている。

統合失調症の医学的解明には大きな進歩が見られるが、今後更なる発展には、患者さんやご家族の理解と協力が不可欠である。